

悠久の名作シリーズ(22)

『回郷偶書』 賀知章

李白を長安詩壇に推した人

賀知章は、初唐の高宗顕慶四年(六五四)己未生ま

れ、盛唐の玄宗天宝三年（七四四）甲申年に没した。享年八十六歳であった。字は季眞、会稽（かいけい浙江省紹興）の人である。生年は初唐、没年は盛唐であるので、書物によつては、初唐の人、盛唐の人、と記述が異なっている。玄宗が即位した盛唐のはじめ開元には五十四歳であった。「回郷偶書」は盛年の詩である。

四十三年間の宮仕え

中宗武後の証聖元年（六九五）の進士、賀知章三十六歳であった。任官後は四門博士（四門は北魏の時、国子学即ち貴族の学校の四方の門の側に庶民のために設けた学舎。元代まで存続した。その学舎の教官）大常博士（天子の車の先導をしたり、王公以下の諡を決めたりする、宮中の式典係）礼部侍郎（礼儀、祭祀、官吏の試験などのことを司る次官）秘書監（秘書省の長官）太子賓客（太子の侍従をつとめてその補導の任にあたる）等を歴任した。書物によつては秘書監を最後にやめたというのものもあるが、「旧唐書」巻九、玄宗紀、天宝二年の条に「十二月乙酉二十日、太子賓客賀知章、請度為道士、還郷」とあるので最後の官職が太子賓客であったことがわかる。

酒好きで無欲だった賀知章

賀知章は酒を好んだ。杜甫の「飲中八仙歌」の第一番目

に詠まれている。

知章騎馬似乗船 知章馬に騎るは船に乗るに似たり

眼花落井水底眠 眼花井に落ちて水底に眠る

賀知章は南の浙江省の生まれで、馬に乗りなれていないので酔って馬にまたがった様子は、まるで船にゆられている様であぶなくてしようがない。酔眠はちらちらし、路はたの井戸の中に落ちこんでも気がつかず、井戸の底で眠っているほどである。

八十六歳で道士になりたいと玄宗に願い出て、許しを得、故郷に帰ったが、その際長年の官職のねぎらいとして、玄宗より褒美に故郷の鏡湖という湖をもらった。財宝ではなく湖をもらったのである。無欲の精神の持ち主であった。

李白を推した賀知章

現代のように、たとえば文壇の登竜門である芥川賞をもらったら作家として認めてもらえる、というような社会システムではなかった。いくらよい詩を詠む人物でも、社会的地位もあり、学問にも秀でた官僚などの推挙がなければ世に詩人として出ることはできなかった。

賀知章は李白より四十二歳年上で、李白が未だ世に知られていない時、すでに長年官吏をし玄宗に仕えていた。玄

宗の信望も厚かった。官吏の中でも長老でまわりの多くの同僚からも信頼されて確固たる地位であった。賀知章は天宝元年（七四二）李白の詩を激賞し、玄宗に推薦した。これにより李白は長安詩壇で「謫仙人」として有名になった。賀知章が官吏を辞め、故郷会稽に帰るため、長安の都を発ったのは、天宝三年正月五日であったと「旧唐書」巻九、玄宗紀にある。長安の都では最長老の帰隱きんにふさわしく、三十六名の応制詩（天子の命によって詩を作る）が詠まれた。そして長安城の東門外の長樂坡（東郊約五キロメートル、長樂駅付近）で、盛大な送別会が催された。李白も長樂坡での公式の送別会に出席して、応制詩を作成した。しかし、李白の場合、長樂坡では別れず、三〇キロメートル先の陰盤駅（昭応県城の東北にある宿駅、今の臨潼りんとう県の東北の陰盤）まで見送った。賀知章が官吏を辞める時には、李白は宮廷詩人となっていた。陰盤駅までいったのは、李白の心からの感謝と送別の意を表す行為だったのだろう。この年の春、賀知章は故郷、会稽で八十六歳の生涯を閉じるのである。

長年の官職を全うし故郷に帰って詠じた詩

回郷偶書

少小離家老大回 少小にして家を離れ老大にして回る

郷音無改鬢毛催 郷音改まる無く鬢毛催す

兒童相見不相識 兒童相見て相識らず
笑問客從何處來 笑って問う客は何處従り來るか

意解

若い頃に志を立てて故郷を出、年をとって帰ってきた。お国なまりは未だに直らないが、鬢の辺りの毛は白くなりまた薄くなってしまった。

一族中の子供たちは私と顔をあわせても互いに識らない。どうして笑いながら「お客さまはいったいどこからおいになったのですか」と尋ねられるのだ。

四十三年もの長き官吏を辞め、会稽に帰って（七四四）「回郷偶書」の詩を二連作した。テキストA46―3は、その一である。

その二

離別家郷歲月多 家郷に離別して歲月多し
近來人事半銷磨 近ごろ來れば人事半ば銷磨す
唯門前鏡湖水 唯門前の鏡湖の水有るのみ
春風不改舊時波 春風は旧時の波を改めず



意 解

長い間故郷を離れていたが、最近帰ってきてみれば人の世は私が昔故郷にいた頃とは人情が消えうすくなったと思われる。

ただ門前の鏡湖の水だけが春風に吹かれてあの頃と同じ波をたてている。

我が国でも広く読まれていた詩

賀知章の詩は十九首残っている。「回郷偶書」は、江戸時代広く読まれていたと、中華学院名譽哲士の山田勝美先生が著述しておられる。その中に江戸中期の国学者、賀茂真淵の「後岡部日記」に「くれ過ぐるほど、岡部の家にいたる……いとけなき姪どもなど、はせ来たれども、見しらぬかほなればにやあらん、とみにむつもれず、なれしばかりの人々は、髪のよもぎは似ずなりぬあれど、くにぶりの詞のみやしるかりけん、いづれの所よりとは問はざりける。」（私が夕暮れ過ぎに岡部の家についていた。まだおさない姪たちが、走り寄って来たけれども、見しらぬ顔であったからであろうか、すぐなじむこともできず、昔慣れ親しんだ者たちだけが、私の髪のよもぎのようにごま塩になった様子が、昔とは似ていなかったけれど、国なまりの言葉だけで私とわかったのだろうか、何処からおいでになったのとは問わなかった。）とい

う文がある。あきらかに賀知章の詩を意識しての文であると。

鑑 賞

故郷を離れているとだれしも望郷の念にかられるのは当然で、この当時長安から会稽までは、三月かかったという、そのような遠い道のりの故郷をずっとしので暮らした事だろう。年老いたら故郷へ帰り、ゆっくり暮らしたいと思っていたことだろう。お国なまりも直らずじまいで、八十六歳で故郷へ帰ったら、一族の子供たちが見知らぬよそのおじいさんが来たので、笑いながら「お客さんはどこから来たのですか」と尋ねたのである。賀知章は、昔のままの変らぬ山、川、たたずまい、そしてどの人も皆よく知っていて包容力のある故郷が当然と思っていたが、子供達のその言葉聞いて、宮仕えを全うした充実感と、故郷へ帰ってきた安堵感にぽっかり穴のあいたような淋しさにとらわれた事だろう。その老年の気持ちをも、平易な詩語で綴っている詩である。

この時自分が玄宗皇帝に推した李白が唐を代表する大詩人と、後世まで仰がれるのも考えてもみなかったであろう。今私達が李白の詩に出会えて日々朗吟できるのも、この賀知章がいたからである。